



琵琶湖・淀川流域対策に係る研究会について ～令和4年度 取組報告～

令和5年4月27日
本 部 事 務 局

「琵琶湖・淀川流域対策に係る研究会」（平成26年7月設置）において、平成28年9月に報告書が取りまとめられた。同報告書で整理された課題の解決に向け、関西広域連合の流域府県市で構成する2つの連絡会議（リスクファイナンス連絡会議及び水源保全連絡会議）においては、下記のとおり連合委員会で示された「今後の取組の方向性」に基づき、令和4年度に様々な取組を実施した。また、同研究会を開催し、これらの取組等について報告を行った。

記

今後の取組の方向性（令和4年4月28日）

1 リスクファイナンスに関する取組について

- (1) 流域の広域的相互扶助制度や地域コミュニティによる共助の必要性、被災時における地域コミュニティのニーズ等の情報発信
- (2) 保険対象をより明確にし、今回取りまとめた報告書を関係機関等に提案
- (3) 広く大学の研究機関等との連携の可能性を調査

2 水源保全に関する取組について

- (1) 各府県市の水循環に関わる施策（森林・農業・環境等）を共有
- (2) 施策の効果等の可視化について調査、既往の研究やデータを集めて、構成府県市で共有・意見交換
- (3) 一般の流域の住民等に向けてシンポジウム等を開催し、流域連携の機運を醸成

1 リスクファイナンス連絡会議

琵琶湖・淀川流域において新たな連携の機運を高めていく契機となるよう、リスクファイナンス連絡会議における議論の過程等を取りまとめた「リスクファイナンス連絡会議報告書」（令和4年3月作成）について、次の関係機関等を対象に報告するとともに、関西広域連合のホームページにおいて情報発信を行った。

■ 防災研究所等を有する全国の大学等研究機関 23 機関

（京都大学防災研究所、神戸大学都市安全研究センター、和歌山大学災害科学教育研究センター、徳島大学環境防災研究センター、東北大学大学院附属災害制御研究センター、鹿児島大学地域防災教育研究センター、琉球大学島嶼防災研究センター、立命館大学防災フロンティア研究センター、関西学院大学災害復興制度研究所 等）

■ 国の関係機関 内閣府（政策統括官 防災担当 等）

国土交通省（水管理・国土保全局総務課 等）

国土交通省近畿地方整備局（災害対策マネジメント室、河川部水政課 等）

2 水源保全連絡会議

流域の水循環の重要性をより深く認識するため、構成府県市に対して、水源保全や水循環に関する施策等について調査を実施し、その調査結果について情報共有を行った。

構成府県市から回答のあった森林施策や環境施策等について共有する中で、森林・林業や気候変動に関する調査研究について情報提供があり、加えて、滋賀県の施策である「マザーレイクゴールズ：MLGs」（琵琶湖版のSDGs）と関連させた一般向けの情報発信について意見交換を行った。

こうした調査結果に基づく構成府県市との意見交換を踏まえて、より知見を深めるために滋賀県琵琶湖環境科学研究センターの森林に関する研究についての講義を受講するとともに、流域が抱える課題を広く発信すること等を目的に「琵琶湖・淀川流域シンポジウム」の開催に向けた検討を行った。

《連絡会議の開催実績》※（ ）内は主な議論内容

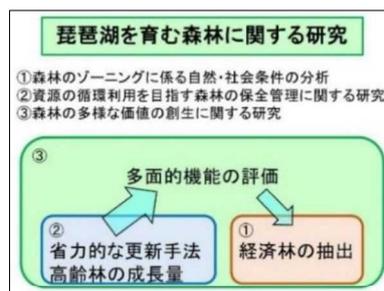
- 第1回 令和4年 6月 9日（水循環に関する施策等の調査の進め方等について議論）
- 第2回 令和4年10月 4日（調査結果の情報共有、意見交換）
- 第3回 令和4年11月17日（琵琶湖・淀川流域シンポジウム等に関する検討）
- 第4回 令和5年 2月 9日（滋賀県琵琶湖環境科学研究センターの講義等）

(1) 滋賀県琵琶湖環境科学研究センターによる講義

第4回連絡会議において、滋賀県琵琶湖環境科学研究センターの小島専門員を招聘し、「琵琶湖を育む森林に関する研究」についての講義を受講した。構成府県市が抱える森林施策の課題を共有しながら、同専門員から専門的・技術的な助言を受けるとともに、様々な意見交換を行った。

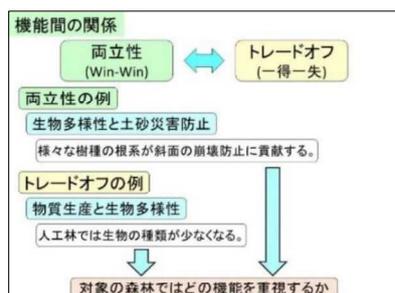
【センターの研究概要】

- ①「森林のゾーニングに係る自然・社会条件の分析」、②「資源の循環利用を目指す森林の保全管理に関する研究」、③「森林の多様な価値の創生に関する研究」の3つのテーマを設け、行政が必要としている科学的根拠を提供するため、森林の多面的機能を評価することを目標に研究が進められている。

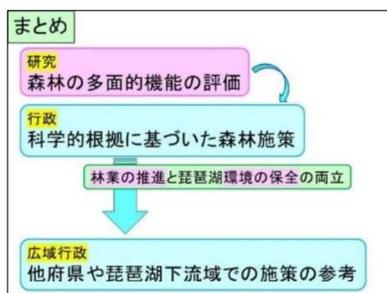


※出典「滋賀県琵琶湖環境科学研究センター資料」

- 森林の機能は、機能間でトレードオフの関係になるものがあるため、対象森林ではどの機能を重視するか検討する必要がある。研究を通じて、「林業の推進」と「環境の保全」の両立をめざした森林施策に資する情報が提供される。



※出典「滋賀県琵琶湖環境科学研究センター資料」



※出典「滋賀県琵琶湖環境科学研究センター資料」

(2) 琵琶湖・淀川流域シンポジウムの開催

【日時】 令和5年3月20日（月）14：00～16：00

【場所】 大阪府立国際会議場 12階 特別会議場

【テーマ】 気候変動とどう向き合うか
～琵琶湖・淀川流域を巡る治水・利水
そして自然環境保護のドラマ～



開会挨拶 with ミヤクミヤク

【プログラム】

- ① 講演Ⅰ これからどうする？ ～関西のくらしと気候変動～
塩見 泰子 氏（気象予報士、防災士、健康気象アドバイザー）
- ② 講演Ⅱ 気候変動と淀川流域や大阪湾の水害リスクの今後
森 信人 氏（京都大学防災研究所 副所長／教授）
- ③ 講演Ⅲ 琵琶湖・淀川における流域の取組み ～過去・現在から未来へ～
三和 伸彦 氏（滋賀県 理事、(公財)琵琶湖・淀川水質保全機構 理事長）
- ④ MLGs 体操
- ⑤ トークセッション「これからの琵琶湖・淀川流域 ～このドラマをどう紡ぐか～」
 - 活動紹介 大学生ボランティアによる環境保全活動～琵琶湖を守るための第一歩～
NPO 法人国際ボランティア学生協会 IVUSA
 - 登壇者 塩見氏、森氏、三和氏、IVUSA
コーディネーター：多々納 裕一 氏
(琵琶湖・淀川流域対策に係る研究会座長、京都大学防災研究所 教授)



気象予報士 塩見泰子 氏による講演



登壇者一同によるトークセッション



展示ブース
(NPO 法人国際ボランティア学生協会 IVUSA)

【参加者数】 350 名（会場：150 名、web：200 名）

【書面アンケートの結果】 ※会場の 66 名の方からアンケートを回収

- ・ 「シンポジウムの満足度」に関する質問では、「非常に満足」が 23 名、「満足」が 30 名、「未回答」が 13 名であり、全体的に好評であったことが伺える。
- ・ 参加者の感想としては、「気候変動に関する意識が高まった」、「防災・減災について意識が高まった」、「琵琶湖・淀川流域の活動について理解が深まった」等の意見が多数あった。

第7回 琵琶湖・淀川流域対策に係る研究会の開催結果について

- 1 開催日時： 令和5年3月29日(水) 14:00～16:00
- 2 開催形式： web 会議
- 3 出席者： 多々納裕一委員（座長）、石田裕子委員（副座長）、津野洋委員、
中川一委員、中村正久委員
- 4 議 事： (1) プラスチック対策検討会の取組状況について
(2) 水源保全連絡会議に関する取組について
(3) リスクファイナンス連絡会議に関する取組について

5 主な意見：

(1) プラスチック対策検討会の取組状況について

- 関西広域連合等の施策と効果の関連を見るためにも、プラスチックの代替品や生分解性プラスチックの普及率についても検証モデルに組み込んでもらう方がよい。
- まだまだ精緻化するところは結構ある。人間の努力行為あるいはモラルなどのヒューマンファクターや市町村の条例化による人間の行動規制、川の営力なども影響してくる。
- ベースのモデルを作り、様々な要素を踏まえて精緻化し、人の行為でごみの量がどう変化するかといったモデルを組み込むなど、いろんな改良をしてもらうとよい。
- 市民の方からごみの写真をスマホで送ってもらい発生源の情報を集めたり、あるいは河川のカメラで年間のプラスチックごみの流出量を定常的に把握するなど、モニタリングを継続し、施策との関連性を分析できるようにすると、性質ごとにどれくらいごみが出てきそうか分かるかもしれない。

(2) 水源保全連絡会議に関する取組について

- この部会は森林の状況と水資源量との関連性を分析するという議論がもともとあったが、それを政策的に分かりやすい指標まで落とし込めていないところがあった。説得力のある議論を進めるに当たり、気候変動関係で既往研究があるはずなので、研究成果を整理しながら進めた方がよいと思う。
- 獣害がどれだけ進めば、今後、どういうふう水源保全に影響してくるのか、あるいは土砂流出にどう効いてくるのか、そういったことも踏まえてトータルで琵琶湖周辺の森林の問題を検討して欲しい。
- シンポジウムで醸成された機運をどういう活動で使うかという議論で、琵琶湖の環境改善ってというのは、皆さん興味をお持ちだと思うけど、森林植生がどれほど効果を持つかという議論については、まだはっきりしていない。そこを準備していくことがこれから課題だと思う。

(3) リスクファイナンス連絡会議に関する取組について

- 霞堤のようなグリーンインフラでは、霞堤で洪水を率先して引き受ける地域と、霞堤により洪水が軽減される地域がある。少しまとまりは小さくなるが、リスク分散の考えがあるかと思う。
- リスクの定量化みたいなところをちゃんとできれば、もっとよくなるのではないかと思う。その上で、どのように補完するかということにつながる。
- 誰かがリスクを引き受けているということを流域の中で理解を深めていくことが、この研究会や広域連合の役割かと思った。そういった取組が今すぐできなくても将来的にできるように検討する余地は残していただきたい。